

太宰府の文化財

361

播磨からきた土器

東播系須恵器の鉢 鎌倉時代

太宰府では、平安時代の終わりから室町時代の初め（いまからおおよそ900年前から700年前）の人々の生活の痕跡が見つかる、必ずと言っていいほど出土する土器があります。それがこの「東播系須恵器」の鉢です。古墳から奈良時代にかけて焼かれた須恵器に似た灰色の焼き上がりのもので、平安時代以降の東播磨地域で焼かれたものを「東播系須恵器」と呼んでいます。器の種類としては甕、椀などもありますが、太宰府では鉢が多く出土します。鉢とは、底部から口の縁にかけて大きく広がる形の器のことを指し、皆さんが現在も使っている道具で例えると、すり目がないすり鉢がイメージに近いと思います。普通は調理具として物をすりつぶしたり、こねたりすることに使っていました。出土資料の内側の底面をみると、摩耗して薄くなっているものが多く、かなり使い込まれていたことが想像できます。また、外側の底の部分を観察すると火を受けたものもありますので、

煮炊きする道具としても使われていたようです。

この鉢は太宰府から遠く離れた播磨国（現在の兵庫県）の東部にある神出、三木、魚住などの窯跡群で作られて、瀬戸内海を通じて北部九州まで運ばれてきました。全国の遺跡での出土状況を見てみると、瀬戸内を中心とした西日本地域に多く、京都でも多く出ており、東は関東まで出土が確認できます。それだけ当時の生活になくてはならないものだったのでしょう。

この鉢があると、いろいろな食材をすったりこねたりできるので、粉もの（うどん、そば、まんじゅうなど）の食文化が、前の時代に比べて大きく発展したと考えられています。数百年続いた東播系須恵器鉢の役割は、丈夫で硬い備前焼などの陶器のすり鉢が普及するに従って終焉を迎えますが、中世の食文化にとって重要な役割を果たした道具であったことは間違いありません。

文化財課 高橋 学



東播系須恵器鉢（奥園遺跡第3次調査出土）

太宰府の文化財

362

かるかや物語 ～太宰府市民遺産第9号「苺萱の関跡とかるかや物語」

「ここは筑前苺萱関所 歌でかなしい物語り」

野口雨情^{※1}が昭和初期に作詞したご当地ソング、「筑紫小唄」の一節です。このように絵葉書や観光案内図などで「苺萱の関跡」^{※2}が名所として紹介されていたのには、雨情の歌詞にあるように、関所まつわる物語(伝説)に由来します。一般に、「苺萱物語」や「苺萱道心と石堂(童)丸^{※3}」として知られています。

物語のあらすじは次の通りです。(原典や地域、寺によって、少しずつ内容は異なります。)

苺萱の関の関守であった加藤左衛門尉^{じょうしげうじ}繁氏は、ふとしたことをきっかけに世の無常を感じ、身ごもった妻と娘を

残して出家してしまいます。繁氏の出家後に生まれた男子は、繁氏の幼名にちなみ「石堂丸」と名付けられました。

やがて石堂丸は父恋しさに母と共に旅に出ます。繁氏が高野山で修行していると聞いた母子は、高野山を目指し麓の学文路の宿に着きますが、そこで宿屋の主人から高野山が「女人禁制」であることを知らされ、幼い石堂丸が一人で山に上ることになりました。

石堂丸は幾日も山中を父を尋ね歩いた末に、偶然出会った僧・苺萱道心から父がすでに亡くなったことを告げられます。実はこの道心こそ石堂丸の父・繁氏本人でしたが、修行中の身であるが故に父と名乗る事ができなかったのです。肩を落として石堂丸が山を下りると、

麓の宿で待っていたはずの母は長旅の疲れがもたで亡くなっていました。さらに、筑紫に戻ると、石堂丸の姉もまた病で亡くなっていました。身寄りのなくなつた石堂丸は、再び高野山の道心を訪ね、出家して道心のもとで修行することになりました。実の父子である二人でしたが、道心は生涯そのことを明かすことなく、最期は信州で一生を終えました。

この物語は、中世に高野聖の間で生まれ、各地に伝えられたと考えられています。古くは謡曲や説経で伝えられ、そして浄瑠璃や歌舞伎の演目とされました。そのため全国的に知られ、江戸時代以降、物語ゆかりの場所・苺萱の関跡は太宰府の名所の一つとして絵

図などで紹介されてきました。

かつては水城小学校で使われた副読本『郷土讀本』でも取り上げられ、子どもたちに教えられていたほか、昭和



昭和初期の観光絵ハガキ「写真の高まり」の塚は、地元では石堂丸の姉・千代鶴の墓と伝えられていました。



『太宰府廿四詠』^{※4}に描かれた苺萱の関跡



『郷土讀本』昭和18年刊行(太宰府市文化ふれあい館蔵)

和30年頃までは、水城小の学芸会で定番の劇だったといわれています。現在は、ゆかりの地でありながら地元で物語が消えつつある事を危惧し、坂本区・通古賀区の住民を中心に結成された「かるかや物語を伝える会」によって市民遺産として守り伝える活動が始まっています。

※1 野口雨情：1888年～1945年。大正から昭和にかけて活躍した詩人、童謡・民謡作詞家で、「七つの子」「シャボン玉」などの作詞で有名。「筑紫小唄」は昭和初期に雨情が二日市を訪れて作詞したもの。

※2 苺萱の関：坂本の関屋交差点付近に中世頃まであったとされる関所。詳しくは「広報ださい」平成26年12月号をご覧ください。

※3 石堂丸の表記には、「石堂丸」「石重丸」の両方があり、寺や地域によって異なります。福岡一帯では、繁氏の誕生に深く関わる石堂地蔵に重きを置き、「石堂丸」とする事が多いようです。

※4 『太宰府廿四詠』：明治17年刊行。太宰府の古物2種と12の名勝地を紹介したもので、吉岡梅仙の画に、息子の拜山が漢詩を賛しています。

文化財課 遠藤 茜

お知らせ 7月18日～9月29日の間、太宰府市民遺産を紹介するパネル展を市内各所で巡回します。詳しくは、今月の広報13頁をご覧ください。

太宰府の文化財

363

王城神社

通古賀五丁目の住宅街の中に木々に囲まれた静かな空間があるのをご存じでしょうか。そこには古くから祀られてきた王城神社が鎮座しています。今回は、この「王城神社」について紹介したいと思います。

王城神社の所以は寛政二（1790）年に船賃法印によって書かれた

「王城神社縁起」に見ることができません。縁起には、創始は神武天皇が日向より東征の際、大城山（四王寺山）に城を構え、城内に事代主命と武甕槌命を祀ったと記載されています。ちなみに、事代主命は「物事を知る神」と解釈されることから託宣の神であり、国譲り神話において

釣をしていることから七福神の一人「恵比寿」と同一視されています。武甕槌命は雷神で国譲り神話の中で力比べをする

ことから相撲の元祖ともいわれる神です。同縁起にはその後、天智天皇により大宰府防衛のため大城山に大野城が築かれる際、祀られていた事代主命と武甕槌命は通古賀と現在の春日市に移され、事代主命は、王の城が



王城神社

築かれていた山から移されたことにより「王城大明神」と呼ばれるようになったと書かれています。また、神武天皇に仕えたと言われる田中熊別の子孫により祀られ、田中氏衰退の後は地元の人々により祀られてきたことが記されています。

明治時代初期に書かれた「福岡縣地理全誌」にも「王城神社縁起」と同様の記述が見られるほか、岩屋城の城主として知られる高橋紹運や小早川隆景といった太宰府にゆかりのある武将たちによって造立、再建され祀られてきたことが書かれています。

現在、王城神社境内には本殿以外にも「王城神社縁起」に田中熊別の子孫であり、中央と地方結ぶ官道に設置された駅に関わったと記載されている人物を祀る早馬大明神と大神



田中橋碑

宮、田神社、白峰神社を末社として合祀しているほか、板碑や田中橋碑など多くの碑が建てられ、地域の方により守り継がれています。

また、「王城神社縁起」や「福岡縣地理全誌」に王城神社に関係の深い人物として記載されている田中氏は田中長者として知られ、テレビアニメ番組でも紹介された「田中長者と虎丸長者」の昔話として伝えられているほか、田中熊別の墓といわれる板碑が「田中の森」と呼ばれ、鷺田川に架かる田中橋の北西の一角に現在も見ることができます。

最後になりましたが、王城神社が鎮座する「通古賀」の地名の由来を紹介します。「筑前国統風土記拾遺」には、「通」は「大道」、「古賀」は「国衙」を意味し、大きな道が通る交通の要衝であり、古代日本の律令制において役所がおかれた場所であったことが記されています。通古賀に国衙が置かれていたのかは、今後の発掘調査にゆだねる事とします。

文化財課 沖田 正大

太宰府の文化財

364

「花寺」 国分尼寺を意味する墨書土器

国分松本遺跡第14次調査 国分二丁目 奈良時代

今年の初め、国分松本遺跡第14次調査から「花寺」と墨書された土器が出土しました。これは墨書土器といって、墨で文字や記号・絵などが書か

れた土器のことを言います。この文字を解読することで、昔の地名や名前などがわかったり、当時のようすを知ることができたりします。



▶ 墨書土器「花寺」

今回見つかった墨書土器は、奈良時代の井戸の中から見つかりました。直径14・1cm、高さ2・0cmの土師器の皿で、墨書はこの土器の裏底の中央に見えます。

さて、この「花寺」と書かれた墨書土器ですが、いったいどのような意味が込められているのでしょうか。まず、「寺」という字が入っているため寺院に関係することは間違いあり

ません。調査地の周辺には、東側に国史跡・筑前国分寺跡、西側には筑前国分尼寺の推定場所があります。そして、調査地から出土した土器が国分寺・尼寺の時代と重なってくることから両寺との関係が考えられます。

この国分寺・国分尼寺は、天平13(741)年に仏教の力によって国を安定させることを目的に、聖武天皇によって出された国分寺建立の詔のもとに全国に造られました。国分寺は正式名称を「金光明天王護国寺」と言い、国分尼寺は「法華滅罪之寺」と言います。

全国で「花寺」の墨書土器の出土例をさがしてみると、奈良県法華寺(総国分尼寺)、千葉県上総国分尼寺跡、山梨県甲斐国分尼寺跡などが見つかっています。いずれも国分尼寺で、これらの遺跡では「花寺」のほかに、「法花寺」の墨書土器が出土しています。これらの漢字は「法華滅罪之寺」と共通することから、国分尼寺の正式名称を略称したものであると考えられ、このうち「法花」は「法華」と同じ意味であると解釈されます。よって、国分松本遺跡第14次調査で見つ



かった「花寺」が意味するものは筑前国分尼寺であると考えられます。

現在では筑前国分尼寺の姿を見ることはできませんが、今回見つかった「花寺」の墨書土器は、筑前国分尼寺がこの国分の地に確実にあったことを伝えてくれる大事な資料の一つなのです。

文化財課 中村茂央

太宰府の文化財

365

客館の喫茶

推定客館跡(特別史跡太宰府跡・朱雀三丁目)

8世紀末～9世紀前半

皆さんは来客の際、どのようなお茶を出したり、はたまたお酒を出したりする人もいらつしやるかもしれませんね。

中国では古くから茶は飲まれていたのですが、唐の陸羽(？～804年)という人です。彼が茶の知識を『茶経』という書物にまとめたことで、喫茶が



越州窯青磁の茶碗・茶托



須恵器の火舎(破片)



奈良三彩の火舎(皿の一部)

盛んとなり、世界中に広がりしました。日本にも9世紀初め(平安時代)までに伝わり、僧や貴族に広がったと考えられています。その後衰退しますが、中世に再び盛んとなりました。

陸羽が記した『茶経』には、茶道具についても詳しく記されています。このなかで最上とされた茶碗(盃)が、「越州」(越州窯青磁)でした。「秘色」とも呼ばれ珍重された青磁で、陸羽は、その緑灰色という色が「玉」に似ていること、茶の色が緑に見えることなどをその理由に挙げています。

この越州窯青磁の茶碗・茶托が、古代の迎賓施設と推定される客館跡から出土していることがわかりました。ここでは茶碗のほか、事例の少ない茶托が2種類3点も見つかっています。

もう一つ、茶道具の可能性があるのが火舎です。火舎とは、大きな皿に獣の足を模した脚がつく容器で、香炉や、暖をとる手あぶりなどに用いられました。これが『茶経』のいう「風炉」とされたことが考えられます。日本でつくられた奈良三彩は、茶道具の種類がそろっているため8世紀には喫茶が伝わったとする説があります。客館跡とその周辺から奈良三彩の火舎や須恵器の火舎が見つかっています。越州窯青磁も8世紀末には伝わっており、ここでは早くから茶がたしなまれていた可能性があります。

苦くも香り高いお茶と、美しい茶道具は、華やかなる1200年前の国際交流の場でも一役買ったようです。これらは現在、太宰府市文化ふれあい館の「まるごと太宰府歴史展2015」で展示しています(11月3日～火・祝まで)。推定客館跡については、九州国立博物館開館10周年記念「新羅王子がみた太宰府」展もあわせてご覧ください(11月29日～日まで)。

文化財課 井上信正

太宰府の文化財

366

大宰府条坊のイヌはハイブリット犬 大宰府条坊跡から出土した動物骨より

大宰府条坊跡の発掘調査では井戸や道路側溝といった、有機質がパツクされたような土壌からごくまれに古代の動物の骨が出土することがあります。

大宰府条坊跡では朱雀五丁目の第278の2次調査では平安時代9世紀の井戸跡から3個体以上の、朱雀三丁目の第63次調査では10世紀の井



大宰府条坊跡第278の2次調査の井戸（9世紀）から出土したイヌを含む獣骨



大宰府条坊跡第278の2次調査出土のイヌの頭骨

戸から6個体以上、五条二丁目の第224次調査では12世紀の条坊側溝から5個体以上のイヌの骨が出土しています。このように大宰府条坊跡では平安時代を通してイヌの存在が確認されています。文献からはさらに遡って奈良時代にも大宰府ではイヌが飼われていたことが伺えます。『正倉院文書』という奈良東大寺正倉

院に残された天平10（738）年の文書中に、御鷹部領使という役職の目下部宿禰麻呂が鷹持ち20人、鷹犬10頭を率いて大宰府から都（平城京）に上ったという記載があります。このことから奈良時代にはすでに大宰府管内では鷹狩をおこなうためにイヌを飼育していたことがわかります。イヌには人と同様に旅の糧として米が与えられており、手厚く飼われていたことが想像されます。

大宰府条坊跡から出土したイヌの骨からはいろいろなことがわかりました。一つにはいづれの骨にも解体したり肉をそぎ落したりした痕跡が確認できなかつたことです。イヌの骨は縄文時代早期以来、国内の遺跡で出土していますが、弥生時代になると長崎県壱岐市原の辻遺跡では胴から四肢を切断した解体の傷跡がある骨が見られ、食用にイヌが飼われていたことが知られています。同じように中世の広島県福山市草戸千軒町遺跡でも食用となった多量のイヌの骨が出土しており、弥生時代以来、日本ではイヌが食されていたことがわかっていきます。しかし、今のところ古代の大宰府においてはその

ような事例は出ていません。

もう一つわかったことがあります。イヌの頭蓋骨の大きさが草戸千軒町遺跡例や現生種であるシバイヌと比較しても大きい特徴があるということです。一方では第64次出土例中には四肢骨では小型になる在来の種もいたようです。専門家は大陸との盛んな交流拠点であった大宰府には、大陸から連れて来られた体の大きな外来種のイヌがいた可能性が高く、在来犬と交雑し繁殖していたのであろう、と指摘しています。『続日本記』天平4（732）年の条では隣国の新羅国より「蜀狗一口、獵狗一口」が、『類聚国史』天長元（824）年の条では渤海国より「契丹大狗二口」がもたらされ（狗は犬のこと）、渤海大狗を都の神泉苑に放ったこともわざわざ記されており、往時の都では異国のイヌがもてはやされていたことを示しています。

大陸に近い古代の大宰府条坊ではイヌまでがハイブリットで、異国の面持ちのあるものが飼われていたようです。

文化財課 山村信榮

太宰府の文化財

367

新指定された文化財

8月31日に行われました太宰府市文化財専門委員会の答申を受けて、10月20日付で、以下の7件が新たに太宰府市指定文化財に指定されました。太宰府市指定文化財は、これだけで合計30件となります。

有形文化財（5件）

○老松社本殿

所在地：宰府四丁目

老松社本殿は、建築様式から17世紀後半に建立されたと推測され、近世初期の特徴が良好に残る。市内で



▲老松社本殿



▲日吉神社本殿



▲宝満山の石造鳥居



◀木印
(印面「直嶋」)



▶銅印
(印面「高」)



▲光明寺のチシャノキ



▲坂本のムクノキ

は太宰府天満宮本殿と志賀社に次いで古く、学術的価値は極めて高い。

○日吉神社本殿・拝殿 附棟札

所在地：観世音寺五丁目

本殿は17世紀後半、拝殿が正徳4(1714)年の建立で、丁寧な造りで良好に残る。市内で唯一残る江戸期の拝殿を備えた本殿として貴重である。

○宝満山の石造鳥居

所在地：大字内山

この鳥居は、宝満山山中にあり、一の鳥居と呼ばれている。延宝7(1679)年に建立されており、建立年代や施主が明確な鳥居としては市内で最も古い。

○木印(印面「直嶋」)

所在地：太宰府市文化ふれあい館

この木印は、学院中学校から出土したもので、印面には「直嶋」と陽刻されている。全国的に数少ない古代の私印の中で、木印の出土は極めて少ない。

○銅印(印面「高」)

所在地：太宰府市文化ふれあい館

この銅印は、筑前国分寺跡から出土したもの。青銅製で「高」を陽刻している。印面は3・3×2・7cm

で、印面の大きさが「方1寸5分以内」という規定内であり、典型的な古代の私印と言える。

天然記念物（2件）

○光明寺のチシャノキ

所在地：宰府二丁目

光明寺のチシャノキは、樹高13・7m、幹周2・47mで、市内では太宰府天満宮のヒロハチシャノキに次いで大きい。

○坂本のムクノキ

所在地：坂本三丁目

坂本のムクノキは、樹高25・5m、幹周3・65mで、市内で2番目に大きなムクノキである。

文化財課

太宰府の文化財

368

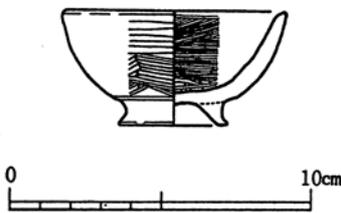
六器の瓦器

平安時代 太宰府天満宮境内地遺跡

昭和60年に太宰府天満宮境内で行った発掘調査では、平安時代を中心とする基壇状の遺構（土でつくった高まり）や整地面と共に多くの遺物が見つかりました。その中の遺物を1つ取り上げてみます。それは瓦器と呼ばれている種類の土器で、小さな椀の形をしたものです。瓦が土器の名称に入っていることからわかるように、この土器は瓦と同じように窯で焼かれ燻（いぶ）していません。そのため、全体に黒い色をして



六器の瓦器小椀
画像提供：九州国立博物館
撮影：山崎信一氏



瓦器小椀実測図

おり、瓦と同じく磨かれた器の表面が銀色に光っています。高台が付いたこの小椀は割れてしまつて半分ぐらいの大きさしか残っていませんが、復元すると口径は7・6cm、器高3・8cmとなります。現在の器だとお猪口ぐらゐの小ぶりの器といったイメージです。この瓦器の小椀について改めて調べてみると、いろいろと興味深いことがわかりました。まず大宰府周辺で作られたものではなく、当時の都

があつた畿内周辺で生産されたもので、生産地の名前をとつて、樟葉型瓦器椀と呼ばれているものです（樟葉は現在の大阪府枚方市周辺）。その特徴は内外面に施された緻密なヘラ磨きです。外面の磨きは分割磨きと呼ばれる手法で高台近くまで磨かれており、丁寧な仕上がりです。年代的には11世紀後半ぐらゐに作られたと考えられます。作られた畿内から遠く離れた九州まで運ばれたという点でも貴重なものといえます。さて、この瓦器小椀は何に使われたのでしょうか。生産地である畿内では出土状況（寺院からの出土が多い）や、器に残つた使用痕跡から、近年では「六器」と呼ばれる密教法具として主に使われたのではないかと考えられています。六器とは小ぶりの椀が六つそろつて1セットになつており、材質は金銅器、銅器、瓦器などです。本尊や曼荼羅の前で、密教僧が加持祈禱などの修法を行う際に、木製の壇を用意し、その上に法具を並べるのですが、その際に壇の四辺には、火舎を中心にして左右に三つずつの六器と華瓶、飲食器を1つずつ並べて行つたと伝わっています。



密教法具と六器
(手前の6つが六器 内山妙香庵にて)

太宰府天満宮の歴史を紐解くと、天満宮安楽寺と呼ばれていた時代には天台宗との強い結びつきが認められますが、この六器の瓦器もそのような繋がりを示す資料の1つになるかもしれません。

文化財課 高橋 学

この資料は現在、九州国立博物館開館10周年記念新春展示『太宰府天満宮の地宝』（会期：1月1日～2月28日）で展示しております。ぜひ、開館10年を迎えた九州国立博物館で太宰府の文化財に注目してください。

太宰府の文化財

369

梅花の宴

太宰府市民遺産第5号

「万葉集つくし歌壇」

市内のあちらこちらで梅の花がほころぶ季節です。梅は太宰府とゆかりの深い花で、市の花にもなっています。さまざまある太宰府と梅の関わりの中のひとつに、「梅花の宴」があります。

天平二（730）年正月十三日（新暦では二月八日）、当時の大宰帥（大宰府の長官）



大宰府展示館に展示されている梅花の宴人形
（公財）古都大宰府保存協会蔵



昨年の梅花の宴の様子（水城・大野城築造 1350年を記念して防人の歌がたりも行なわれました）

れ、梅花の宴の様子を知ることができません。

宴の列席者には、ホストである旅人を含めて32人の名が見え、順に一人一首ずつ歌を詠んでいきます。その中からいくつかを紹介します。

①正月立ち 春の来たならば
かくしこそ 梅を招きつつ
楽しき終へめ

（大意：正月になり春がきたので、このように梅を招いて楽しい日を過ごそう）

②わが園に 梅の花散る
ひさかたの 天より雪の
流れくるかも

（大意：我が家の庭に梅の花が散っている。それとも天から雪が流れているのであるうか）

③梅の花 散らくはいづく
しかすがに この城の山に
雪は降りつつ

（大意：梅の花が散っているというのはどこだろう。それはそれとして、この城の山には雪が降り続けている）

①はトップを飾った歌で、客人の中で最も位の高い大宰大式（大宰府の次官）・紀男人が詠みました。これから始ま

る歌会を盛り立てるにふさわしい歌です。②は大伴旅人が、

③は大宰大監（大式の次の位）・大伴百代が詠んだもので、③が②に対するかけ合いになっています。③の歌中の「この城の山」の「城」は大野城のことです。つまり四王寺山です。旅人の序文の中には、「膝を近づけ盃を飛ばす」とあって、列席者が親しく膝を寄せ合ってお酒を楽しむ様子もうかがえます。大宰府政庁の近くにあったと考えられる旅人の邸宅から、庭の白梅と四王寺山を眺めながら官人らが酒と歌を楽しむ光景を想像できるのではないのでしょうか。歌には物のような姿かたちはありませんが、太宰府を物語る大切な文化遺産と言えます。

この梅花の宴での歌を含め、大宰府やその周辺で詠まれたとされるものは『万葉集』に200首以上あり、当地での盛んな歌人の交流は「万葉集筑紫歌壇」と称されています。これらの歌と、歌に詠まれた大宰府の情景・歌人たちの物

語を後世に伝えようと、太宰府で万葉集講座や歌碑めぐりの活動が続ける大宰府万葉会によって、太宰府市民遺産「万葉集つくし歌壇」が提案されました。会では毎年2月に「梅花の宴」を再現する催しを行なってきて、今年で20回目を数えます。はるか遠い古代に詠まれた歌の数々が、引き継いで歌われ続け、今も人々に親しまれているのです。

文化財課 遠藤 茜

①③の歌は、①大宰府政庁跡西側、②太宰府天満宮境内の九州国立博物館エスカレーター入口横、③歴史スポーツ公園内、に歌碑が建っています。

※「城の山」を基肄城（基山）と解釈する説もあります。

●「第20回大宰府万葉梅花の宴」の詳細は、本号21頁や太宰府館HPをご覧ください。
●第6回太宰府市景観・市民遺産会議
日時：3月13日(日)午後1時
会場：九州国立博物館
ミュージアムホール

太宰府の文化財

370

高雄地区の古墳時代 — 下高尾古墳 —

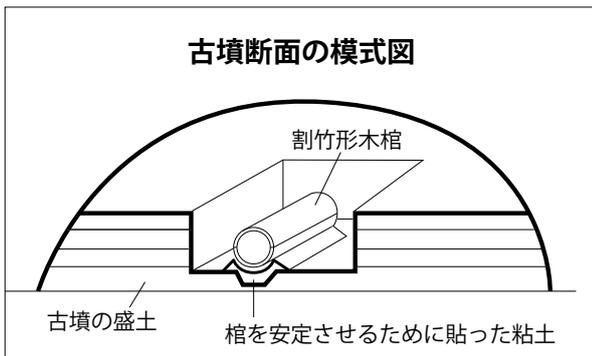
現在の高雄地区は、高雄台団地や梅香苑団地などの団地として開発されたので、昔の様子を思い浮かべることがなかなか難しいのではないのでしょうか。しかし、以前は里山が広がり、多くの古墳が残されていました。



下高尾古墳の木棺の痕跡

下高尾古墳は、昭和63(1988)年に発掘調査が行われました。古墳の形は直径約19mの丸い形をした円墳と呼ばれるものです。古墳のほぼ

た。なかでも太宰府南小学校の建設の際に発掘調査が行われた菖蒲浦古墳群は多くの副葬品が出土しているため、ご存じの皆さんも多いでしょう。今回は、その菖蒲浦古墳群の南側で発掘調査が行われた下高尾古墳を紹介いたします。



下高尾古墳出土の鉄剣

中央には素掘りの穴の中に納められた棺の痕跡が残っていました。棺は残っていませんが、棺を安定させるために埋葬するための穴の床に貼られた粘土の形(丸い不安定な棺を乗せるため、粘土は中央が窪んだ「U」字状になっていました)から、丸太を縦半分に割り、内側をくり抜いて作った割竹形木棺と呼ばれるものであったことが分かりました。この粘土から木棺のおよその大きさも分かり、長さは約4mあったようです。また、この棺の中に副葬品として長さ約30cmの鉄で作られた剣1本が納められていました。割竹形木棺は、

古墳時代前期(約1700年前ごろ)に使われていた棺であることから、下高尾古墳が市内では数少ない古墳時代前期の古墳であることが分かりました。また、北側にある菖蒲浦古墳群の1号墳も同様に割竹形木棺を使っているため、この2基の古墳はほぼ同じころの古墳であると考えられています。

高雄地区は、市内でもまとまって古墳が造られた地域の一つですが、これまでに調査された古墳の多くは古墳時代後期(約1500〜1400年前ごろ)のもので、この2基の古墳が高雄地区で最も早い時期に造られていたことが分かります。当時の有力者が使った割竹形木棺を使った古墳は市内では3基と数少なく、この内2基が高雄地区に造られたことは市内の古墳時代の様子を考えるうえで重要な古墳であることが分かります。

文化財課

沖田正大